

強い対格と弱い対格

— 対格の類型論のための試論 —

Strong Accusatives and Weak Accusatives:
Toward a Typology of the Accusative Case

遠 藤 史
Endo, Fubito

ABSTRACT

This paper proposes a typological parameter for the accusative case in nominative-accusative languages. The parameter is binary: ‘the strong accusative’ versus ‘the weak accusative’. The strong accusative functions to mark the object as such. The weak accusative, on the other hand, essentially functions to distinguish the object from the subject; it surfaces only if accusative object marking is inevitable. By examining various case-marking processes in Finnish and Kolya Yukaghir, the author tries to show that some of the cases that mark objects in these languages can be regarded as weak accusatives. The author further claims that postulating these two types of accusatives, rather than subsuming all accusatives into a single type, can contribute to the typological study of nominative-accusative languages.

1. はじめに

諸言語の格標示システムの類型論的考察において、20 世紀後半、特に 1970 年代以降注目を浴び、格の類型論の進展に大きく貢献した現象の一つが能格性 (ergativity) であることに疑いの余地はないであろう。能格性をそのままタイプに冠した書物—たとえば Plank (1979) や Dixon (1994) など—の出版が

象徴するように、また言語類型論の概説書の中にしばしば能格性を扱う独立した章が設けられていること—たとえば Comrie (1978) など—が示すように、人類言語の性質のより深い理解のために能格性の考察がもたらしたものは大きい。

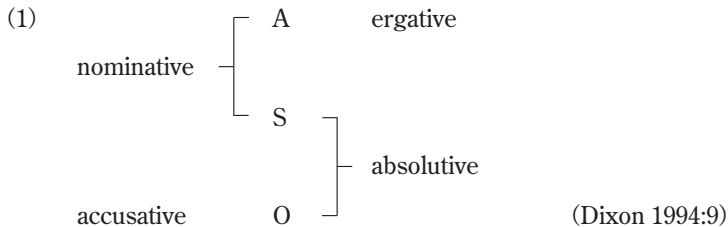
ところがその反面、格の類型論の考察の多くが能格性に向けられたことに伴い、その相対物とも言ってよい対格性 (accusativity)、あるいはその基礎となる対格 (accusative) についての考察は相対的に閑却されてきたように思われる。Dixon (1994:1) が指摘するように能格性が「なじみ深い文法のパターンである対格性と相補的なものである」(筆者訳) とすれば、おそらく対格性あるいは対格についても、より多くの考察が試みられてしかるべきではなかったであろうか。もっともこの指摘がいみじくも示すように、対格性は私たちにとって「なじみ深い」ものであり、英語・ロシア語・トルコ語・日本語などの話し手の多い言語が共有する文法のパターンであるがゆえに、「他者」の強い徴をまとった能格性に比べて、言語類型論の研究者たちの知的好奇心をそそりにくかった可能性はあるかもしれない。

本論文はこのような観点から、対格性を示す言語のいくつかを視野に入れ、対格の類型論的考察に向けた一つのパラメータを試論として提出することを目的とする。具体的には、一般的に「対格」として記述されている諸言語の格の中に、目的語の表示そのものを中心的な機能として持つ「強い対格」と、一定の条件が満たされたときに限って現れ、当該名詞句をとりまく様々な状況の必要に応じて目的語の表示をせざるを得ない「弱い対格」の二つのタイプが存在しうることを提案したい。両者は目的語を表示するという点で最終的には同じ結果を生み出すのであるが、その結果に至る文法的過程には違いがあり、それが文法の他の部分とも関連している可能性があることも示唆したい。もちろん本論文で扱う言語は非常に限られており、その意味で本論文の主張はあくまで試論の域を出ないけれども、複数の言語に見られる現象を統一的に説明できるという点において、若干の有効性は見出しうると思われる。

本論文の構成は以下の通りである：次の第2節では、能格性と対格性の根幹をなすシステムをごく簡単に概観して対格性の中心的特徴を明らかにした後、強い対格と弱い対格の特徴づけを提示する。第3節はケーススタディーであり、対格性を示す二つの言語（フィンランド語とユカギール語）について、弱い対格がどのような文法的過程を経て出現するのかを見る。第4節では対格に関する従来の研究との関連における本論文の提案を考察する。以上が本論文の構成である。

2. 強い対格と弱い対格

Dixon (1994) は能格性を論じるにあたって、その基本となるいくつかの基本的な概念を提示している。格表示システムに関する基本的図式は次の通りである。



すなわち言語における三つの基本的統語関係として S（自動詞主語）、A（他動詞主語）および O（他動詞目的語）を指定すると、この三者を格表示する場合に、人類言語に多く見られる格表示システムには2種類がある。一方は(1)の左側のコラムが示す対格システムであり、ここではAとSが同じ格（主格 nominative）で表示され、それに対してOが別の格（対格 accusative）で表示される。もう一方は(1)の右側のコラムが示す能格システムであり、ここではAのみが特別な格（能格 ergative）で表示され、それに対してSとOが別の共通した格（絶対格 absolutive）で表示される。彼のあげているところに従っ

て、対格システムの例としてラテン語を、能格システムの例としてディルバル語（北東オーストラリア）をあげよう。⁽¹⁾ まずラテン語の例：

(2) *domin-us veni-t*, the master comes

(3) *domin-us serv-um audi-t*, the master hears the slave (Dixon 1994:9)

(2) での S と (3) での A（「主人が」 *dominus*）は主格で表示され、それに対して (3) での O（「奴隷を」 *servum*）は対格で表示されている。次にディルバル語の例：

(4) *ɲuma banaga-nʷu*

father+ABS return-NONFUT

father (S) returned

(5) *ɲuma yabu-ŋgu bura-n*

father+ABS mother-ERG see-NONFUT

mother (A) saw father (O) (Dixon 1994:10)

(4) での S と (5) での O が絶対格（略号 ABS）で表示され、それに対して (5) での A のみが能格（略号 ERG）で表示されている。(5) における語順（目的語・主語・動詞）に注意されたい。

対格性や能格性という用語は、このような格表示システムが示すようなパターンと合致する形で、上記の3項が文法の各レベルにおいて取り扱われる現象を意味する。たとえば文法のある部門で S と O が共通の扱いを受け、それに対して A が異なった扱いを受けるならば、そこには能格性の現れが認めら

(1) 以下の例はスペースの関係で元の例を半分に減らしている。より厳密な議論を行うためにはもちろん、Dixon (1994) が行っているように、それぞれの名詞が主語および目的語として現れた場合の格をすべてあげることが必要である。

れる。一方 A と S が共通の扱いを受け、それに対して O が異なった扱いを受けるならば、そこには対格性の現れが認められる。言語類型論では格表示システム以外の部門における対格性や能格性の研究も進展しているが、本論文ではこれら広いトピックには立ち入らず、議論を格表示システムに限る。

形態論的な観点から見ると、これら格表示システムの格の一方に、明示的な格の標識を含まない、いわゆる「ゼロ記号」が現れることがしばしばある。たとえば Dixon (1994:11) の指摘によれば、能格システムではゼロ記号（形態論的なゼロ表示あるいは無標識の異形態）はほとんど常に絶対格に現れる。また対格システムではゼロ記号はかなり多くの場合に主格に現れる（少数の例外はある）。一般的な傾向としては、上記三つの基本的統語関係において、分布が限られた有標の項（対格あるいは能格）に標識を有する形が現れ、それ以外に広く分布する無標の項（主格あるいは絶対格）にゼロ記号が現れると言うことができるだろう。かくして対格システムの場合、O は一般的に何らかの標識を伴って格表示されることになる。

上記二つの格表示システムがどのような要因によって成立するのかについては、まだ決定的な説明が与えられているとは言いがたい。現在のところ有力なものとしては、対格システムは談話的要因から発生する機能の共通性に基盤を置き、それに対して能格システムは意味の共通性に基盤を置くという説明がある。たとえば Blake (1994) によれば、主語は談話上「古い」(given) 素材であって、この特徴は A と S に共通する。この機能の共通性に重点を置いて主語を格表示し、談話上「新しい」(new) 素材を担う目的語の格表示に対立させると対格システムが生じる (132-134)。一方で能格システムはむしろ意味の共通性に着目し、動作に意味的に最も深く関与する項である S と O を絶対格で表示し、動作に外部的に関わる項である A を能格で表示する (136-137)。Dixon (1994) も、S と A の共通性については様々な主語特徴をあげ、一方 S と O の共通性については情報構造や抱合の可能性などの現象をあげることによって、基本的に同じ方向での説明を試みている。その上で「S と A が同一線上に並ぶかなり

の事項があり、また S と O が同一線上に並ぶ相当の事項がある。このことが、なぜ多くの言語が (S/A の共通性を利用することによって) 基本的に対格型であり、また相当数の言語が (S/O の並行性を利用することによって) 能格型が優越するかを説明してくれる」(55; 筆者訳) と述べている。このような説明がある一方で、より古くからなされてきたものとして、上記二つの格表示システムに共通する要因に「区別的機能」(discriminatory function) を指摘する説明がある。たとえば Comrie (1978) によれば、同一文中に二つの項が生じたとき、両者をどのように区別するかによって、二つの格表示システムの違いが生じる。その結果、一般的に言って「主格・対格言語は A-P-V の構文で P を表示することによって A と P を区別する；能格言語は A-P-V の構文で A を表示することによって A と P を区別する」(381; 筆者訳) ということになる。⁽²⁾

この両者はそれぞれ異なった要因に格表示システムの基盤の違いを求めるものであるが、このうちどちらがより適当な説明であるかはまだ決着していないと言わざるをえない。能格性の考察を中心に据えた研究では前者の説明が取られることが比較的多いように思われる一方、広範囲の言語における格の現象を扱う中で、説明中に格の区別的機能を取り入れようという試みは現在でもある (cf. Malchukov and De Swart 2009)。両者の説明を本論文が主に考察している対格に引きつけて述べてみよう。前者の説明によれば、対格の基盤には談話的機能があり、そこから生じた目的語という統語関係の表示が行われているということになる。一方後者の説明によれば、対格の基盤には格の区別的機能があり、そこから生じた目的語の格表示が対格という現象を顕現させていることになる。両者のうち、どちらが適当な説明と言えるであろうか。

筆者はこの疑問に対して、対格の基盤を強引に一つの要因に解消してしまうよりはむしろ、対格の基盤に両者の要因が共存し、パラメータによって二種類の類型に分かれると主張したい。すなわち、目的語の格表示を主な機能とする

(2) Comrie (1978) では他動詞目的語に対し、Dixon (1994) の用いている O ではなく、P という記号が使われている。

対格が存在する一方で、区別的機能を主な機能とする対格もまた存在すると考えたい。その上でこの二種類の対格に対して、前者の要因によって生じる対格を「強い対格」、それに対して後者の要因によって生じる対格を「弱い対格」と呼ぶことを提案したい。このような提案は、対格に関する複数の要因の共存を許すことになり、そのため一見状況を複雑にするように思われるが、その一方で個別言語の格表示の実態により即した説明が可能となる利点がある。次の節では若干のケーススタディーを試みることによって、この主張の裏付けを行いたい。

3. ケーススタディー

3. 1 フィンランド語

この説では個別言語の格表示の実態をより細かに観察し、上記の主張を具体化することを試みる。はじめにフィンランド語の実例を検討しよう。フィンランド語は対格システムの格表示を行う言語であり、主語は主格で、それに対して目的語は対格で表示されうる。なお議論の都合上、以下しばらくの間は主語・目的語に一般名詞が使われた場合のみについて検討し、人称代名詞が使われた場合についてはその後検討する。

(6) *Aika loppu-u.*

time end-3SG

‘Time is up’ (Karlsson 1999:122)

(7) *Siljä jo-i maido-n.*

S. drink-PAST/3SG milk-ACC

‘Siljä drank (up) the milk’ (Karlsson 1999:134)

ここで (6) は自動詞文であり、主語 *aika* 「時間」は単数主格で表示されている。単数も主格も標識はゼロである。一方 (7) は他動詞文であり、主語の *Siljä* 「シ

ルヤ（人名）」は単数主格で、目的語の *maidon* 「ミルクを」は単数対格（標識 -n）で表示されている。これら是对格システムの教科書的な例だと言えるだろう。

ところがより広い範囲の例を観察すると、目的語の表示は必ずしも対格のみによって行われるわけではないことが明らかになる。次の二つの例を検討しよう。

(8) *Janne kaipa-a jo-ta=kin uut-ta.*

J. long.for-3SG something-PART=ENC new-PART

‘Janne longs for something new’ (Karlsson 1999:136)

(9) *Simo juo olut-ta.*

S. drink/3SG beer-PART

‘Simo drinks beer / is drinking (some) beer’ (Karlsson 1999:137)

これらの例はいずれも他動詞文であり、主語は一貫して主格で表示されているのに対し、目的語は分格（*partitive*）で表示されている。分格の格表示が行われるのは一定の意味的条件が満たされた場合であり、その代表的なケースを列挙すると、(a) 否定文の目的語であるとき、(b) 動作が一定の結果に達していないとき、(c) 感情を表わす動詞の目的語であるとき、(d) 分割可能な名詞に関し、動作がその一部あるいは不定量にしか及ばないとき、などである (Karlsson 1999:134-138)。分格の表示はこれらの意味的条件のどれか一つが満たされた場合に起こり、たとえば例文 (8) は (c) の意味的条件を、また (9) は (d) の意味的条件を満たしているので目的語は分格表示となる。いずれにせよこのように意味的条件はかなり多種多様なので、それらの一つが満たされた結果として目的語が分格表示されるケースは実際にはかなりの割合になる。⁽³⁾ すなわちフィンランド語において、目的語に対格が現れるのは実際には一部の

(3) Karlsson (1999) はこの状況を簡潔に、「したがって分格は対格より『強い』格なのである」(158) と表現している。

ケースに過ぎないということになる。

フィンランド語の格表示の実態をさらに複雑にしているのは、次のように目的語が主格で表示される場合である⁽⁴⁾：

(10) *Osta-kaa lehti!*

buy-IMP.2PL newspaper

‘Buy a newspaper!’ (Karlsson 1999:162)

(11) *Koira vie-t-i-in pois.*

dog take-PASS-PAST-INDEF away

‘The dog was taken away’ (Karlsson 1999:162)

これらの文において目的語はいずれも単数主格（ゼロ標識）で表示されている。すなわち命令文である（10）の目的語 *lehti* 「新聞を」と、受動文である（11）の目的語 *koira* 「犬を」がそれである。なおフィンランド語において、受動文は不定人称文（「誰かが～を～する」）と解釈されるので、受動文に主語は存在せず、その唯一の項は目的語として分析されることに注意されたい。これらの例が示しているように、フィンランド語で目的語が主格で表示されるのは、命令文や受動文のように、そもそも同一文中に主語が存在しない場合に限られる。主語が存在する一般的な他動詞文においては、上記の例文（7）が示すように目的語の対格表示が起こる。フィンランド語の文法で伝統的に行われているこの説明を言語類型論の視点から解釈するならば、すでに Comrie (1978) が指摘しているように、「(…) いわゆる -n 終わりの対格は、A が存在する場合は P に対して用いられるが、A が存在しない場合（たとえば命令文）には用いられない」（382）と述べることができる。

（4）フィンランド語の伝統文法では、ここで「主格」の目的語と呼んでいるものを、「主格形の対格」の目的語と呼ぶ。これは、対格と目的語の結びつきがきわめて強いヨーロッパの伝統文法の規範に従った呼びかたである。本論文では近年の言語類型論や生成文法の視点からのフィンランド語研究の一般的な方向に従い、これを「主格」の目的語と考える。

以上述べた状況を要約するならば、フィンランド語の対格は、(a) 分格表示が行われる意味的条件がすべて満たされない場合にのみ表示され、かつ、(b) 同一文中に主語が存在する文においてのみ表示される、と述べることができる。そして対格表示が行われる要因として最も有力なのは、この条件 (b) より、二つの項が生じる他動詞文の中で主語と目的語を区別することであると言える。この状況を観察すると、フィンランド語の対格が非常に限られた条件下においてのみ表示されることは明らかである。また、対格表示の要因として、目的語を積極的に表示することをしていない点も明らかであるように思われる。すなわちフィンランド語の対格は、限られた意味的な条件下において、主語と目的語とを区別するためのいわば「最後の手段」として存在していると考えることができよう。これらの点を考慮するならば、フィンランド語の対格は目的語の表示を主な機能とするものとは異なっており、区別的機能がその主要な機能であると言える。これは筆者の提案する「弱い対格」に相当するものである。

実際のところ、フィンランド語には目的語の表示を主な機能として持つような別種の対格も存在する。この点を明らかにするために、以下では人称代名詞の対格について観察してみることにしよう。人称代名詞の対格は標識 *-t* によって特徴づけられており、一般名詞の標識 *-n* とは形も少し異なっている。

(12) *Ritso ve-i minu-t elokuv-i-in.*

R. take-PAST/3SG I-ACC cinema-PL-ILL

‘Ritso took me to the cinema’ (Karlsson 1999:160)

ここで目的語は人称代名詞 *minä* 「私」の対格の *minu-t* 「私を」である。人称代名詞は一般の名詞と同じく、上記で論じた分格表示が起こる意味条件に従う。

(13) *Minä rakasta-n sinu-a.*

I love-1SG you-PART

‘I love you’ (Karlsson 1999:136)

ここでは動詞が感情を表わすので、上記の意味的条件の (c) が満たされ、目的語は分格 *sinua* 「君を」で表示される。

ここで興味深いことは、人称代名詞の対格に対しては、一般名詞について上で論じてきたような区別的機能を想定することはできないということである。すなわち (12) を命令文に交替させた場合、

(14) *Vie minu-t elokuv-i-in.*

take/IMP.2SG I-ACC cinema-PL-ILL

‘Take me to the cinema!’ (Karlsson 1999:160)

となり、人称代名詞の目的語は主格表示ではなく、対格表示を受ける。仮に人称代名詞の対格に区別的機能があるとしたならば、この場合には主格が生じなければならないところであろう。したがって、人称表示の対格の機能には区別的機能はなく、その機能はむしろ目的語そのものを積極的に表示することにあるとすることができる。さらに同様の機能は受動文においても観察される。

(15) *Minu-t vie-t-i-in elokuv-i-in.*

I-ACC take-PASS-PAST-INDEF cinema-PL-ILL

‘I was taken to the cinema’ (Karlsson 1999:161)

ここで受動文（不定人称文）の目的語 *minut* 「私を」が主格ではなく対格によって表示されていることに注意されたい。この場合、対格はやはり目的語そのものを積極的に表示するために機能していると考えられる。2 節の最後で提案した筆者の特徴付けによれば、この人称代名詞の対格は「強い対格」であると言えることができる。

以上、特に対格表示に焦点を当てて、フィンランド語の格表示をやや詳細に検討してきた。その結果分かったことは、フィンランド語の対格には区別的機能を主に持つ「弱い対格」と目的語の表示を積極的に行う「強い対格」が共に認められるということである。具体的には「弱い対格」は一般名詞の対格において認められ、「強い対格」は人称代名詞の対格において認められる。両者の境界線は3人称代名詞の中間にあり、有生(animate)の3人称代名詞 hän「彼、彼女」と he「彼ら、彼女ら」が「強い対格」の例であり、それに対して無生(inanimate)の指示代名詞 se「それ」と ne「それら」が「弱い対格」の例となる。分裂格表示システムの考察でしばしばとりあげられるシルバースティーンの名詞句階層を、角田(2009:41)の整理に従って参照するならば、階層の高い方から見て、1人称>2人称>有生3人称までに「強い対格」が現れ、これに対して階層上それ以下である、無生3人称>親族名詞・固有名詞>人間名詞>動物名詞>無生物名詞の範囲では「弱い対格」が現れることになる。

3. 2 ユカギール語

ユカギール語は北東シベリアに話される少数言語であり、系統的には孤立しているが、地理的な分布から便宜上古アジア諸語(あるいは英語での用語にしたがって旧シベリア諸語 Paleosiberian)の一員として分類されることが多い。現在も話されているユカギール語は二つであり、一方はコリマ・ユカギール語(Kolyma Yukaghir)、他方はツンドラ・ユカギール語(Tundra Yukaghir)と呼ばれている。なおユカギールという名は他称であり、自称の民族名は odul(コリマ・ユカギール人)あるいは wadul(ツンドラ・ユカギール人)である。以下では主に、筆者が言語調査に従事した経験のあるコリマ・ユカギール語について考察していきたい。以下、引用文献の表示のない例文は、筆者が調査において収集したものである。

格表示システムの類型という観点からコリマ・ユカギール語のデータを観察するならば、その格表示は基本的に対格システムであると言える。まず自動詞

文において、主語は基本格（ゼロ標識）で表示される：

(16) *taŋ jalɕil-ge irkin mumuʃa: e:re-ʃ.*

その 湖 -LOC 1つの カタルカ 泳ぐ -I3SG

「その湖には1匹のカタルカが泳いでいた」

ここで主語の *irkin mumuʃa:* 「一匹のカタルカ」は基本格で表示されている。次に他動詞文において、主語は基本格で表示される一方、目的語は何らかの標識を伴った格で表示される⁽⁵⁾：

(17) *taŋ ʃoromo-ɸul ɸarna: aʒu:gele medi:-nu-l'el-ŋa:.*

その 人 -PL カラス ことば -ACC 聞く -PROG-EVID-T3PL

「その人々はカラスのことばを聞いたようだ」

ここでは主語の *taŋ ʃoromopul* 「その人々」が基本格で表示される一方、目的語である *ɸarna: aʒu:gele* 「カラスのことばを」は対格で表示されている。これらの例から、基本的な図式として、コリマ・ユカギール語がゼロ標識の基本格（主格に相当するもの）と何らかの有標の形態論的標識を伴った格（対格に相当するもの）によって主語と目的語を格表示していることは明らかである。この特徴に注目して、ひとまず類型論的には、コリマ・ユカギール語を対格システムの格表示を有する言語と捉えることに問題はないだろう。

この言語の格表示システムに関する問題はこの先にある。より広い範囲のデータを調べてみると、ゼロ標識の格である基本格の分布が、対格システムの格表示において通常見られる範囲よりかなり広いことが観察されるのである。すなわち基本格はまず自動詞文・他動詞文の主語に現れる。このことは上の例

(5) (17) と以下の (18) の動詞の接尾辞を対照すれば分かるように、この言語では自動詞の主語を表示する人称接尾辞と他動詞の主語を表示する人称接尾辞は形が異なっている。

(16) と (17) より明らかであろうと思われるが、さらに一つ例文を追加する：

(18) *tamun-ge foromo čumu mol-l'el-ni.*

これ -LOC 人 皆 言う -EVID-13PL

「そこで人々は皆（こう）言ったそうだ」

この自動詞文における *foromo* 「人」は基本格で表示されている。ところがその一方で、他動詞文の目的語もまた基本格で表示される場合がある：

(19) *χodon-get nuk-te-m met uörpe?*

どこ -ABL 見つける -FUT-INT.T1SG 私 子どもたち

「どこで子供たちを（私は）見つけられようか」

この文は他動詞文であり、主語（1 人称単数）は省略されているものの、動詞の人称表示から容易に復元可能である。それに対し目的語である *met uörpe* 「私の子どもたち」（3 人称複数）には格表示の標識が何もないので、基本格で表示されていることが分かる。上記の例文（17）における目的語が対格で表示されていたことを考えると、他動詞文の目的語が基本格表示されているこの例は一見奇妙に見える。

さらに広い範囲の資料を観察すると、このような現象の背後には主語と目的語の人称が関係していることが判明する。この言語では主語が 1 人称あるいは 2 人称、目的語が 3 人称の場合には、目的語は基本格で表示される：

(20) *met Nikolaj-de: juö.*

私 ニコライ -DIM 見る /T1SG

「私はニコライ君を見た」

(21) *tet Nikolaj-de: juö-mik.*

君 ニコライ -DIM 見る -T2SG

「君はニコライ君を見た」

すなわち主語は (21) では 1 人称単数であり, (22) では 2 人称単数である。それに対して目的語は両方とも Nikolajde: 「ニコライ君」であり, 3 人称単数である。なお人名の末尾につく接尾辞 -de: は指小辞 (「小さな〜」) を意味する一種の愛称であって, 格表示の要素ではないことに注意されたい。すなわち主語が 1 人称あるいは 2 人称であり, 目的語が 3 人称の場合には, 目的語はゼロ標識の基本格で表示される。(19) の他動詞文の格表示もこれと同様に説明できよう。一方, 主語と目的語の人称関係がこれと逆向きの場合には, 目的語は何らかの標識を伴った格によって表示されなければならない:

(22) *Nikolaj-de: met-kele juö-m.*

ニコライ -DIM 私 -ACC 見る -T3SG

「ニコライ君は私を見た」

(23) *tittel tet-kele juö-ŋam.*

彼ら あなたたち -ACC 見る -T3PL

「彼らはあなたたちを見た」

これらの例では主語は 3 人称単数あるいは複数である。それに対して目的語は (22) で 1 人称単数であり, (23) で 2 人称複数である。

例文 (20) から (23) までに見られる非対称性を統一的に扱うには, 次のような人称階層を設定して格表示の有無を説明する方法が最も有効であろうと思われる。⁽⁶⁾

(6) この人称階層は遠藤 (1998) で提案したものである。ここまでに紹介した現象自体はすでに Krejnovič (1982) にも記述されており, 筆者はそれを類型論的な視点を用いて整理した。

(24) (1 人称あるいは 2 人称) > 3 人称

すなわちこの階層上で、動詞の表す動作が階層の上（不等号の左）から下（不等号の右）に向かう場合には、目的語には格の標識が現れず、結果的に目的語は基本格で表示される。この例が上記の例文の (19), (20) および (21) である。これとは逆に動詞の表わす動作が階層の下から上に向かう場合には、目的語は何らかの標識を持った格により表示される。この例が上記の例文の (17), (22) および (23) である。

主語と目的語が階層上同等の場合には、目的語が何らかの標識を持った格により表示される。たとえば 1 人称と 2 人称の関係では次のようになる：

(25) *met tet-ul juö.*

私 君 -ACC 見る /T1SG

「私は君を見た」

(26) *tet met-ul juö-mik.*

君 私 -ACC 見る -T2SG

「君は私を見た」

(25), (26) における人称代名詞の対格の形が (22), (23) とは異なることに注意されたい。目的語の属性そのものは両者間で変わらないので、この形の違いは目的語の属性ではなく、主語と目的語の人称関係の違いに起因すると考えるのが妥当である。一方、主語と目的語がともに 3 人称の場合、目的語の定性 (definiteness) が高い場合には、目的語は対格で表示される（上記の例文 (17) を参照）。一方目的語の定性が低い場合には、目的語は具格で表示される：

(27) *tat emej-gi qa/ə-lə a-m, <…>*

それから 母-POSS 粥-INST 作る-T3SG

「それから（彼の）母は粥を作った」（Nikolaeva 1997）

(28) o:zi:-le nilgi tud-in el=tadi:-nu-l'el.

水-INST 誰も～ない 彼女-ALL NEG= 与える-PROG-EVID/I3SG

「誰も彼女に水を与えなかった」（nilgi「誰も～ない」が主語）

ここで (27) の qafəla「粥を」と (28) の o:zi:le「水を」は、特定の粥や水を指示せず、不定の指示を持っている。

以上に概観してきたコリマ・ユカギール語の基本的な格表示システムは、大きな視点から見れば対格システムを示すとは言えるものの、基本格の分布、さらには目的語の格表示に使われる格の種類の多彩さという点から見て、典型的な対格システムとはかなり性格が違っている。その違いの根幹をなすものはおそらく、この言語の目的語の格表示が、目的語そのものを表示するというよりはむしろ、主語と目的語の人称の関係に目配りすることによって、主語と目的語との間の隔たりを表示しようとしている特徴に求められると思われる。

目的語を表示する形式に着目してみよう。3人称主語の他動詞文における定性の高い3人称目的語を格表示する -gele は、1人称あるいは2人称の目的語を格表示する -kele の交替形であると見なせる。一方、3人称主語の他動詞文における定性の低い3人称目的語を格表示する -le（具格）は、主語・目的語とも1人称あるいは2人称の場合の目的語を表示する -ul と類似した音形を持っていることが観察できる。ここでコリマ・ユカギール語において頻繁に生じる、子音連続を避けるための /u/ の挿入を仮定すれば、両者を一種の交替形と見なすこともあるいは可能かもしれない⁽⁷⁾。とすれば、-gele ～ -kele という形式は、実質的には -ge ～ -ke という要素と、-le ～ -ul という要素が組み合わせ

(7)たとえば monut「言って」という副動詞は、動詞語幹 mon「言う」の後に母音 /u/ を挿入し、さらに副動詞標識 -t を接尾させることによって作られる。この母音挿入は子音連続を避けるために行われている。

れたものと考えすることはできないであろうか。⁽⁸⁾すなわち、主語と目的語との隔たりが比較的大きい場合には二つの要素の複合からなる複雑な形式を用いることによって、反対に主語と目的語との隔たりが比較的小さい場合には単純な形式を用いることによって、目的語そのものでなく、主語と目的語の両者の間の隔たりを表示しようとしているのが、以上に概観した格表示システムの根幹にある性質ではないかと考えられる。

このように考えてみると、コリマ・ユカギール語において目的語を表示する格の根幹には、広い意味で主語と目的語を区別する機能があると言える。その機能はフィンランド語の場合ほど明瞭ではないが、それでも「弱い対格」の性質をこれらの格に認めることは可能であろうと思われる。なおこれらの格のうちでもっとも明瞭に「弱い対格」の性質を示すのは具格である。なぜなら本来具格で表示されるべき目的語が、区別の必要がない環境では基本格で表示されている例が見られるからである。

(29) *alme-ge* *tabud-e* *pala:-j* *erčuon* *a:-delle, [...]*

シャーマン -ABL これ -INST 逃れる -I3SG 「悪いもの する -CONV」

「(彼は) シャーマンからこうして逃れた、悪いことをして」

ここで従属節の目的語 *erčuon* 「悪いもの」は基本格表示である。しかし対応する動詞 *a:* 「する」の主語は3人称単数（主節と同一）なのだから、定性の低いこの3人称目的語は本来、具格で表示されるべきところである。⁽⁹⁾とすればここに基本格が出現する理由はおそらく、同一節内に主語が存在せず区別の必要

(8) この *-ge* ~ *-ke* という要素は、この言語における所格と同一の形である。同系のツンドラ・ユカギール語では、同じ統語的環境における目的語表示に *-kane* という形が用いられるが、この *-ka* も所格と同一の形である。ひょっとすると、本来は基本格である目的語をあえて所格で表示することによって「格落ち」させるという発想がここには伺えるのではないか。

(9) この言語では、副動詞の主語は、それが含まれる従属節を直接支配する節の動詞の主語と同一であると見なされる。

がないからであろう。同様の例は他にもしばしば認められる：

(30) *finel juö-t, irkiĵe irkin köj kebeĵ-l'el*

[畏 見る -CONV] あるとき 1 の 若者 行く -EVID/I3SG

n'as'pien-gen čande enĵuon čuge juö-din.

[ボポフカ川 -PROL 上流に 動物 足跡 見る -CONV]

「畏を見ながら、あるとき一人の若者が歩いていたそうだ、ボポフカ川の上流に動物の足跡をさがそうとして」

従属節内の目的語 *finel* 「畏」と *enĵuon čuge* 「動物の足跡」は本来具格標示が生じうるところであるが、やはり基本格標示である。これらもまた、区別の必要がない統語的環境で生じている。

4. 結びにかえて

ここまで二つの言語の事例を検討し、表面的には対格システムと見えるものの、対格の主要な機能が区別的機能であり、その結果「弱い対格」が生じていると考えられることを論じた。一方でラテン語・ドイツ語・ロシア語などにおける対格は、目的語そのものの表示を主要な機能とする「強い対格」であると考えられよう。ここまでの考察が適当だとすれば、対格に関して「強い対格」/「弱い対格」という類型論的パラメータを設定することが提案できると思われる。

前節で検討したような事例はこれらの言語だけに限られるものではなく、他の言語にも見られることが知られている。たとえば Dixon (1994:63) によると、フィンランド語に類似する事例は、ウラル語族のバルト・フィン諸語（フィンランド語もここに属する）、オーストラリアの Ngarluma 語、Lardil 語および Kayardild 語、北アメリカの南パイユート語などに見られるという。一方ユカギール語のように何らかの階層によって対格の生起が影響される言語は、オー

ストラリアの Rembarnga 語 (Blake1994:121) や Awtuw 語 (Marchukov and De Swart 2009:347-348) などに見られるという。これらの言語の事例を詳細に検討する余裕は本論文にはないが、今後検討を進めるにつれ、これらの言語における対格の事例が集積されていけば、さらなる議論の発展が見られ、対格の類型論に新しい進展が期待できるかもしれない。

第1節で論じたように、能格性あるいは能格システムの研究に比べて、対格性あるいは対格システムの言語類型論的な研究はそれほど深められているとは言えない。今世紀に入ってから比較的注目を浴びている対格システムに関する類型論的な視点としては、目的語の格表示における無標格（ゼロ標識）と有標格の交替に関する、いわゆる Differential Object Marking (DOM) がある。しかしながら Marchukov and De Swart (2009:345-347) の概観によれば DOM 研究の中心は目的語自体の意味的なパラメータに置かれているようであり、本論文が扱ったような現象に注目した研究は今のところ DOM の射程外にあるようだ。今後は現在までに達成された DOM 研究の知見も取り入れて、本論文で扱ったような現象の取り扱いも含め、対格システムの研究全体をさらに広い視野から進展させることが望まれよう。能格システムが類型論的に興味深いものとするならば、その相対物である対格システムも同じくらい興味深いものであるはずである。本論文での考察がこの分野の発展にいささかでも貢献することができれば幸いである。

【謝辞】 コリマ・ユカギール語のデータを収集するにあたり、筆者の数回の現地調査の際、訳者を暖かく迎え入れてくださったネレムノエ村の皆様方に感謝申し上げます。またこの翻訳は以下の科学研究費補助金による研究の成果です：文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) 「北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・歴史的比較研究」(課題番号 21401022) および同基盤研究 (C) 「コリマ・ユカギール語の統語構造と情報構造の関連究明による統語論記述の精緻化」(課題番号：22520434)。

略語一覧

ABS=absolutive (case), ABL=ablative (case), ACC=accusative (case), ALL=allative (case), CONV=converb, DIM=diminutive, ENC=enclitic, ERG=ergative (case), EVID=evidential (mood), FUT=future (tense), I=intransitive, ILL=illative (case), IMP=imperative (mood), INDEF=indefinite (person), INT=interrogative (mood), INST=instrumental (case), LOC=locative (case), NEG=negative (mood), NONFUT=nonfuture (tense), PASS=passive (voice), PAST=past (tense), PART=partitive (case), PL=plural, POSS=possessive, PROG=progressive, SG=singular, T=transitive, 1=first person, 2=second person, 3=third person.

参考文献

- Blake, Barry J. (1994) *Case (Cambridge textbooks in linguistics)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1978) "Ergativity". In: Winfred P. Lehmann (ed.) *Syntactic typology: Studies in the phenomenology of language*. Austin: University of Texas Press. pp.329-394.
- Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity (Cambridge studies in linguistics 69)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 遠藤 史 (1998)「北方諸言語における人称の反転」『和歌山大学経済学部研究年報』第2号, pp.1-21.
- Karlssohn, Fred (1999) *Finnish: An essential grammar*. Second edition. London and New York: Routledge.
- Krejnović, E.A. (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Malchukov, Andrej and Peter De Swart (2009) "Differential case marking and actancy variations". In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford handbook of case*. Oxford: Oxford University Press. pp.339-355.
- Plank, F. (1979) *Ergativity: Towards a theory of grammatical relations*. London: Academic Press.
- 角田太作 (2009)『世界の言語と日本語 改訂版：言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版。